

愛知大学同窓会創立55周年記念誌 『学生たちの証言で綴る創成期の愛知大学』 について

長谷川哲男

〈元東日新聞社長、愛知大学校友〉

愛知大学同窓会は創立55周年記念事業として昨（2007）年11月、『学生たちの証言で綴る創成期の愛知大学』を刊行した。大学創立の昭和21（1946）年からほぼ10年間の創成期について、そこで実際に学び、青春の^{とき}を過ごした人たちが49人がそれぞれの目線で“愛知大学”を綴り、敗戦の中から新たな理想のもと、建学の情熱に燃える大学側とその意気に応えようとする学生たちの真摯なエネルギーが伝わってくる。

愛知大学草創期の昭和22（1947）年、筆者は疎開先の蒲郡から豊橋に戻り、八町小学校に復学した。学校の近く、旧練兵場の一角が宅地化され、新八町となった一帯に愛知大学教職員の住宅が建ち並んでいた。同級生の中にその子女たちがいた。昭和24（1949）年、初めて八町小学校児童会の役員が選挙で選ばれた。6年生4学級の中から担任教諭が指名した各クラス男女2人ずつ計16人

が立候補。4年生以上の児童全員が投票して上位7人が当選した。筆者は7位で当選、会計になったが、筆者のクラスは4人全員が当選し、会長、副会長、書記、会計を独占した。その中の女子2人が愛知大学の板倉鞆音、桑島信吉両教授の長女だった。もちろん、その当時、筆者には2人が「大学教授の娘」という意識は全くなかった。

小学校5年の時、父親が病死しており、まともな進学は断念。青雲の志を抱いて上京したが1年で挫折して帰郷。地元の新聞社に務めながら愛知大学短期大学部に通ったが、学生自治会の活動などに追われて、あまり勉強した記憶がない。追試などで単位は取ったが、安月給に加え、奨学金も記者クラブでの賭け事や飲み代に消えて授業料未納のまま放置していた。数年後、取材を通じて知己を得た当時、短大事務局長の大野一石氏から「授業料未納分を払い込めば、卒業扱いにする」と言われ、授業料は払ったが、当然のことながら卒業証書はない。従って、人から「何年の卒業ですか」と問われても返事に窮する。必要な単位は取得し、遅れ馳せながら授業料も完納しているので、「卒業」とまではいかないにしても「修了」はしていると、自分では判断しているのだが、その時期が通常の卒業時なのか、何年か後、未納授業料を払い込んだ時点なのか、確認しないまま放ってある。

入学と同時に、どういう風の吹き回しか、学生自治会に入る羽目となり、いきなり副委員長を押しつけられた。2年目には委員長をと懇願された



本間喜一名誉学長コーナーを見学する筆者

が、当時すでに地元新聞の記者をしており、委員長は固辞して書記長を引き受けたが、委員長以上の激務に辟易した。“60年安保”闘争の「ハガチー事件」のさい、夜間部自治会を代表して単身、デモに参加した。昼間部自治会委員長の内山健は高校の同級生で、全学連中央執行委員も務めていたが、彼らはひと足先に上京、ハガチー特使の来日阻止を目指して全学連の主流とともに羽田空港を取り巻いていた。豊橋駅午前零時何分発の列車に乗り組むと関西方面から参加の学生たちで超満員。品川駅で下車した混成学生集団は当時の全学連書記長で京都府連委員長の北大路敏？の指揮で羽田に向かったが、間もなく機動隊と衝突し、蹴散らされた。筆者も着衣のボタンが引きちぎられたりしたが、単身参加の気安さもあって流れ解散の形で戦線を離脱し、都内の親戚の家に寄って身繕いしたうえで帰郷した。ハガチーは先発のデモ隊に阻まれて羽田空港から出られず、そのまま帰国した。

安保闘争のさなかとあって、夜間部自治会も市内でデモをした。その都度、書記長の筆者が豊橋署に出かけて手続きをした。他社の警察担当記者が筆者を見付けて「こんなところで何をしているんだ」と聞かれ、往生したこともあった。この書記長時代、筆者自身が毛筆で書いた「愛知大学短期大学部（夜間部？）学生自治会」の看板を自治会室の入り口に掲げた。末尾が字詰まりになり、乾かぬうちに掲げたので墨汁が垂れたように記憶



本間名誉学長と懇談する不二タイムス（東日新聞）の杉田有窓子社長

しているが、この看板がその後、どうなったのかわかるよしもない。

さて、筆者はそのまま地元新聞社に落ち着いた。当社は昭和23（1948）年8月15日、杉田有窓子氏により「東三新聞」として創刊。29（1954）年2月1日、「不二タイムス」と改題し、同年8月27日、株式会社に組織変更した。その時の発起人に、元豊橋市長で衆議院議員だった大口喜六、近藤寿市郎氏らとともに当時、愛知大学学長だった本間喜一氏が名を連ねている。

筆者自身は、学生として本間先生の警咳けいがいに接したことはなかったが、記者としては社長の杉田有窓子が本間先生と新城の観光ホテルで対談したさい、その内容を要点筆記し、原稿にまとめたことがある。2人の対談写真も筆者が撮ったが、その写真が昨年の創立60周年記念写真・パネル展「愛知大学創成期の群像——地域と共に60年」に展示された。寒い時期であったが暖房が十分でなく、本間先生は外套を着たままだった。同行した越知専さん（現愛知大学東亜同文書院大学記念センター運営委員）も写っているが、越知さんが撮影した筆者の写っている写真も残っている。

本間先生の紹介で、杉田有窓子が最高裁長官・田中耕太郎氏と対談したさいも筆者が同行した。田中氏が所用のため、長官室で少し待たされたが、その間に有窓子が「長官の椅子に座った写真を撮っておくれん」と言い出し、1枚撮ったら、次は有窓子が筆者をその椅子に座らせてパチリ。この



本間名誉学長の紹介で最高裁判所を見学。田中耕太郎長官の椅子に座る筆者

本間喜一・小岩井浄学長を「超一流の学者」と褒め称えた杉田社長は愛知大学に対し常に好意的だった



本間喜一・小岩井浄学長の歓送迎会を新聞社主催で行なった

最高歳長官室の椅子に座って交互に撮り合った写真は、今も有窓子のアルバムに残っているはずである。

小岩井浄先生も在学中に接する機会はなかったが、昭和33(1958)年、当社の創刊10周年記念式典が豊橋市公会堂で開かれたさい、来賓としてあいさつに立った小岩井学長が「少なくとも毎日、一本ぐらいいは読者が“これは”と思うような記事を載せてほしい」という趣旨のことを話されたのが、今も心に残っている。

愛知大学との関わりがこの程度の筆者が、大先輩たちの文章を論ずるのは気が重い。同窓会創立55周年記念誌『学生たちの証言で綴る創成期の愛知大学』の内容を紹介するだけにとどめたい。

愛知大学は昭和21年に創立、22年1月に開学した。東亜同文書院など、敗戦によって閉鎖された海外の大学関係者や学生の救済から端を発しているだけに、草創期の卒業生証言は▷「東亜同文書院そして愛知大学へ——念願の中国を極める、今も生きる“書院精神”」小崎昌業氏(昭和23年、旧制法経学部経済科卒)▷「建国大学から愛知大学へ——因縁の地から出発し、また戻って再び進学」佐藤達也氏(25旧経)▷「同文書院ファイナル46期生から愛知大学へ——上海組と内地組



愛大10周年特集号を発行

分離、共通項の“引き揚げ”北川文章氏(26旧経)など、愛知大学ならではの特殊性の中に、敗戦のショックを克服して新生日本の建設に立ち向かおうとする意気込みがうかがえる。

「高師原の青春——ペアの“愛大カラス”、寮の食事は毎日芋攻め」辻井次郎氏(25予修)▷「海を渡れなかった若者たち——通算50日の分校授業、ガリ版刷りの教科書で」関口忠彦氏(30経)▷「他大学から愛知大学——ユニーク学生集まる、単位得て卒論・バイト」太田禎夫氏(27旧法)▷「引き揚げて大学創建に集う——大陸での勉強しなおし、向学心に父からの勧め」三嶽昭雄氏(28旧経)▷「なぜ愛知大学へ——出身校担任の勧め、念願叶い思草寮入り」岩佐一馬氏(29経)▷「女子学生第1号組——当初4人は組別々、半世紀後も寮歌祭に」由比淳子氏(28経)▷「自由と知を愛する大学——念願の“華の法科”へ——兄の勧めで他大学やめて」澤野美得氏(34法)など、新設の愛知大学入学への思いが綴られ、その真摯な学問への姿勢が胸を打つ。

さらに戦後間もない豊橋での青春——学生生活



創成期の学生50人が綴った記念誌

——を綴った「草創期の大学生活——下駄や草履に軍靴——授業より食べ物・バイト」谷藤助氏（25旧経）▷「寮食堂の運営——寮生が軍隊式に盛る、リヤカーで肉もらいに」今田太郎氏（25旧経）▷「同文書院呉羽分校から豊橋へ——収穫麦でパン作り、合宿ゼミは仏法僧聞き」井上方弘氏（27旧経）▷「寮生活——停電には駅で勉強、学長杯で俊逸後輩募る」新井正雄氏（27旧経）▷「大学草創期の風景——“紅顔騎士”は480人集う、旧制は歌詞の六星霜で」奥田廣實氏（27旧経）▷「先生と授業——宿で恩師の背を洗う、仏像の見方、現地学習」福井貞夫氏（27短II経）▷「師を慕って（山本二三丸教授）——無頼のハグレ弟子、資本論講読に終始」鈴木襄氏（28旧経）▷「高師原の青春——羽目を外した寮生活、学も食も飢えていたが」南昌彦氏（28旧法）▷「板倉先生・竹井先生、そして日本寮歌祭へ——ドイツ語の師お二方、学長の念願実り寮歌祭」浅井琢朗氏（28旧法）▷「予科・学部計6年間の豊橋学生生活——マンツーマンに感謝、家族的で面倒見よい」宮崎孝雄氏（28旧法）▷「なぜ愛知大学を選んだか——自由・受難を原点、“零からの出発”で」甲斐一政氏（28経）▷「破帽の青衿——教授陣に魅力を感じて、隣国中国への興味も」中根三郎氏（28法）▷「1948年予科1年生——女子学生に気が散る、タバコと食券を交換」藤井栄氏（28経）▷「思い出すままに——憧れの白線帽に

……、寮から下宿の青春」立木一成氏（28経）▷「我が青春の寮生活——2人部屋に3人で、月夜に高唱『逍遥歌』」など、往時の青春時代を彷彿させる。

特別寄稿の「父・鈴木擇郎のこと——宿願の『中日大辞典』、苦勞した同文書院時代」鈴木康雄氏（26旧経）に加え、「同窓会の設立——川崎氏と呼びかけ、小岩井先生の教訓守る」金丸一夫氏（23旧経）、「学生歌の誕生秘話——や

むなく弟の名で、“不滅の命”一気に作詞」上尾龍介氏（24予修了）、「愛大事件を振り返る——愛大の意義示される、本間・小岩井先生に感謝」豊島忠氏（29経）、「愛大事件と寮生活——ぼくらは青かったが、燦きに出会い宿した」田中良氏（31経）をはさんで、部活動の思い出などが綴られる。

「ラグビー部の草創期——核は“書院”組の4人、初交流試合は引き分け」小林一夫氏（25旧法）▷寮生活から生まれた演劇部——文学論から演劇へ、“豊橋に文化の灯を”と」岩井透氏（26旧経）▷『劇研』処女公演のころ——混乱期若者の叫び、貧乏学生たち意気軒昂」間宮信夫氏（26旧法）▷大学新聞創刊——紙面づくりに没頭、仲人も新聞学教授に」加藤義行氏（推薦校友）▷「柔道部の草創期——元弾薬庫に畳敷いて、合宿10日で剛を制す」校條功氏（27旧経）▷「空手道部の思い出——黒帯の私一人で創部、手書きポスターで募集」田中宏氏（28旧経）▷「全国学生写真連盟と写真部の活動——東松君入部で活発に、“皮肉な誕生”今も燦然と」越知専氏（28経）▷「応援団創設の頃——通学中に勧誘されて、満員夜行で神宮球場へ」眞野克巳氏（31経）など、各部創設のころの秘話が綴られ興味深い。

このあと、恩師や講義、ゼミなどを綴った「第1回の卒業生——好天には室外で受講、軍服や中国服に下駄姿」大見純夫氏（23旧経）▷「海兵

から愛知大学へ、そして大石ゼミ——師弟を紡いだ“KKK”、誇りの“大石遺産”48冊」村上勝利氏(26旧経)▷「予科・学部計4年間の学生生活——バイトに氷菓売りも、厳しかった大石ゼミ」鈴木勝氏(27旧経)▷「大石教授と仲間たちとの交流——病床でもゼミを開講、支部間でOB懇親会も」杉浦威志氏(28経)▷服部・胡麻本先生と授業——最前列席で認められ、代返されお近づきに」高木為一郎氏(28経)▷「3人の恩師——経済で働く原動力、玉野井・岡崎・大石先生」伊藤信雄氏(31経)▷「会計人をめざして大学に学ぶ——好指導者に恵まれ、就職も結婚も師のお陰」加藤峰男氏(32経)が続く。

さらに同窓会事業関係で『自由・受難』の鐘の建て替え——開学20周年記念に、ブロンズ複製し碑併設」鶴田善士氏(29経)▷「財団・同友会設立の経緯——財団は天からの贈物、少額から大きな財産に」青木光利氏(31経)▷「同友会の設立と名古屋同窓会館——よくぞ設立の同友会、宿泊・和室有りの館」荻本亮氏(34法)と特別寄稿「女子短期大学部に入学して——近郊からも集い学ぶ、勉学に部活に苦楽共に」井上承子氏(36女短文)と、多彩な内容である。

愛知大学同窓会会長の安井善宏氏は、この『学生たちの証言で綴る創成期の愛知大学』発刊にあたり、同書「まえがき」で「先輩たち個々の想い、思い出をリレー方式で繋ぐことで、学生・生徒たちの視点で見た大学という組織体の全体実像が浮き上がってきている」とし、「包み隠すことのないすべての事実を知ることによっていっそう母校愛が深まることを期待する」と述べている。

愛知大学の卒業生は、いまや12万人を数え、同窓会組織は51地域支部66部会を形成するという。その歴史と伝統の礎を築いた創成期の先輩たちの証言にふれて、改めてその真摯な姿勢と情熱に感銘するとともに同窓生の裾野の広さを感じ入った。

なお本題とは直接の関係はないが、愛知大学と地域との関わりという意味で、筆者が現役時代に

東海日日新聞に連載を始めた「東日評論」の愛知大学関係者の氏名とタイトルを付記する。1クール5人の方に順番で週1回、3回ずつ執筆していただいた。当初は5人の執筆者の中に毎回、愛知大学および豊橋技術科学大学教員を含めたが、中途から交互に執筆をお願いした。執筆者は学長に推薦をいただいた。

河合秀敏氏＝「秋の国際フォーラム」(平成6年10月31日)「社会人の大学教育」(6・12・5)「私の正月、小さな旅」(7・1・9)▷石井吉也氏＝「大学と国際化」(7・1・30)「地域と大学」(7・3・6)「学生の多様化」(7・4・11)▷加々美光行氏＝「オウム真理教と二つの時代」(7・10・2)「チャイナ・ウオッチャー」(7・11・6)「不条理の苦痛」(7・12・14)▷奥野博幸氏＝「地域づくりの視点」(8・1・15)「住専処理と狼少年」(8・2・19)「サービス産業としての高等教育」(8・3・25)▷大島隆雄氏＝「ドイツ自動車発明秘話(上)」(8・5・20)「ドイツ自動車発明秘話(中)」(8・6・24)「ドイツ自動車発明秘話(下)」(8・7・29)▷松江宏氏＝「マーケティングの40年」(8・9・2)「大店法の歩み」(8・10・7)「中国の小売商業事情」(8・11・10)

堀彰三氏＝「公務正常化への一言」(8・12・10)「株式市場の低迷と企業の役割」(9・1・13)「持ち株会社解禁の意味」(9・2・17)▷河野眞氏＝「社会現象と民俗学」(9・4・13)「ノスタルジーとエキゾチシズム」(9・5・19)「学



大島隆雄名誉教授(左)と筆者

部の新設に携わって」(9・6・23)▷遠藤三郎氏=「橋本流財政再建法」(9・7・28)「特異な国日本」(9・9・1)「お年寄は富裕か」(9・10・6)▷嶋倉民生氏=「故孫平化先生と愛知大学」(9・11・3)「北京・香港直通鉄道」(9・12・8)「勝海舟の中国観」(10・1・12)▷土屋洋二氏=「ドイツ統一とEU」(10・2・9)「プレーメン—あるドイツの町」(10・3・16)「大学が変わる—愛大」(10・4・20)▷高桑稔子氏=「生涯学習時代に向け」(10・5・24)「“食べる”ことの意味」(10・6・29)「フードフェディズム」(10・8・3)▷松下智氏=「茶は世界をつなぐ」(10・9・7)「東アジア文化圏」(10・10・11)「学問の理想郷」(10・11・16)▷丸山伸郎氏=「日中関係の難しさ」(10・12・8)「国際化時代の総合的学習」(11・1・8)「中国の金融危機」(11・2・22)

上道功氏=「今なぜ英会話?」(11・3・21)「私の専門分野『テーマ学』(上)」(11・5・16)「同(下)」(11・5・17)「愛知大学図書館について」(11・6・21)▷交野正芳氏=「介護保険制度」(11・12・6)「全国出張講義事業の視座」(12・1・4)



不二タイムス→東日新聞の評論を飾った愛知大学教授陣の寄稿文

「コミュニティの生活空間と他者」(12・2・7)▷武田信照氏=「大学の教育改革の一焦点」(12・5・29)「市場原理と経済倫理」(12・7・3)「株式経営と“有限責任”論争」(12・8・7)

佐藤元彦氏=「地方による国際協力」(13・1・8)「ローカルな時代からグローバルな時代へ」(13・2・19)「多文化主義の豪州に学ぶ」(13・3・19)▷鈴木規夫氏=「21世紀の大学(上)」(13・8・6)「21世紀の大学(下)」(13・9・9)「文明は衝突しない」(13・10・22)▷李春利氏=「小さな教育実験」(14・3・4)「年年歳歳、花相似たり」(14・4・8)「サッカーは第2の太陽」(14・5・13)▷渡辺正氏=「大学、変革の時代」(14・9・30)「個性的な大学づくり」(14・11・4)「大学の役割と地域社会」(14・12・8)

保住敏彦氏=「発展途上国のソーシャル・セーフティ・ネット」(16・11・22)「先進国のソーシャル・セーフティ・ネット」(16・12・27)「わが国のソーシャル・セーフティ・ネット」(17・2・7)▷名和聖高氏=「北京秀水市場の変容と知財意識」(17・7・12)「文化によって異なる幸福の基準」(17・8・15)「留学生との交流と共生の在り方」(17・9・19)▷沢井耐三氏=「“もう一押し”の効果」(18・2・27)「大学のキャンパスから」(18・4・3)「日本の古典を研究する」(18・5・8)▷阿部聖氏=「“地球から何を学ぶか”を学生とともに模索」(18・10・9)「中産研共同研究でアジアに中部企業を訪ねる」(18・11・14)「豊橋・豊川空襲—米軍資料の調査と整理」(18・12・4)▷伊東利勝氏=「“真実の歴史”と政治」(19・6・12)「“国際交流”無用論」(19・7・16)「あの世と科学」(19・8・20)「ミャンマー問題が問いかけるもの」(19・10・29)

ほかにも大学関係者として藤井隆、山崎一司氏、同窓生として甲斐一政、伊藤般展氏らに執筆をいただいている。